

學小

日本修身書

尋常科  
生徒用

卷四

檢定申請本

K120.1  
31  
4

K120.1

31

4

稲垣千穎編述

# 小日本脩身書

東京 成美堂發兌

小日本脩身書卷四



稲垣千穎編述

## 事親

薩摩國の農夫の二子、兄太郎は十歳、妹龜女七歳の時、母久しく病にふせり、兄は、母に侍するかた

小日本脩身書 卷四 事親

稲垣千穎編述

# 小日本脩身書

東京 成美堂發兌

小日本脩身書卷四



稲垣千穎編述

## 事親

薩摩國の農夫の二子、兄太郎は十歳、妹龜女七歳の時、母久しく病にふせり、兄は母に侍するかた

はら、田畠を作り、毎夕家にかへれば、妹  
 と共に、夏は、母の席をあふぎ、冬は、己が  
 身を以て、母の手足をあたたため、なでさ  
 すりつつ、心をなぐさめなど、大人も及  
 ばぬはかり、心をつけ、孝養をつくすを  
 以て、第一の樂とせり、この事官廳にき  
 こは、キンゴシ金穀をたまひて、賞せられき、  
 孝八百行ノモトナリ。



慕親

マモトノヨリイハ、シメツクゲン源頼家將軍たり、  
 ころ、京都に、微妙と  
 いふ、シラヒセツクシ白拍子あり、七  
 歳の時、その父為成、  
 ざんげんによりて、  
 陸奥に流されける  
 を、一たびなけき、父

を尋ぬる、つてともならんかさて、白拍子を習ひ、江て、鎌倉に下れり、頼家めて、その舞を見、あはれみて、速に、使を陸奥につかはしけるに、為成すでに、病死せり、微妙之をききて、かなしみにたへず、やがて壽福寺といふ寺にいり、尼となりて、父のごりやうをとむらへり、人ノ行、孝ヨリ大ナルハナシ。



愛兄

源義家永保のむかし、清原武衡家衡とたたかひて、陸奥にありけるが、敵のいきほひつよくして、義家の軍ははばやふれたり、そのをり、

白拍子

三 成美堂精房

義家の弟義光ヨシミツは、右兵衛尉ヒマウエノジヨウにて、京都にありけるが、之をきき、朝廷テウテイにそらもんして、れもむきたすけんことを請ひければ、ゆるされざりしかば、つひに官をすてて、陸奥にいたれり、義家喜びて、今わが汝を見るは、父にまみゆるが如く、とて、共に力を合せ、進で敵を止せり。

兄ハ父ニツギテ敬フベシ。



### 愛弟

北條泰時ホウテウマサトキ、評定所ヒヤウカヤウシヨにありて、弟朝時トキトキの家をかこみせむる者ありとききて、ただちに、はせゆきて救スクへり、ある人之をいさめて、公は、今、執權シユウケン

小治政書 卷四

四 成美堂藏版

の職シヨクにあり、自重ミツカクくせられよ、といひければ、春時ハルトキかたちをあらため、人は親シヤクを  
 したしむより大なるはなし、みながら  
 弟の死をみて、救スグはずば、大なる笑ワラヒをま  
 ぬくべし、朝時アサトキのかこまるるは、他人に  
 ありては、小事コトなるべけれど、我にとり  
 ては甚ハナカ大事ダイジなり、といへり、

兄弟ハ手ノゴトク。足ノゴトシ。



女徳

水戸ミトの儒者ジュシヤ、青山西  
 塲ウチダの妻、内田氏ウチダは、よ  
 く、うとに孝養を  
 なし、又家を治ツラシめ、子  
 を教ふるに、きよく  
 ありて、正ただかり  
 人なり、其のまま子

延于の、學問をねこたるを、西塙怒りて、  
 之を撻てば、内田氏爲に謝し、一つかに、  
 孟母が機をたちしことなど話して、は  
 けませり、延于之によりて、志をたて、勉  
 強の功をつみ、後學問なりて、父の業を  
 つぐにいたりしは、父の教はあれど、内  
 田氏の、そだてかたの宜しきによれり、  
 賢キ婦人ハ賢キ男子ヲツクル。

友誼

尾張の人、中西淡淵の門にて、伊藤冠峰、  
 南宮大湫と友たり、淡淵が尾張を去る  
 に及びて、門人半は大湫を師とし、半は  
 冠峰に従へり、冠峰の妻の兄某、冠峰を  
 助けて、大湫をねし倒さんとしければ、  
 冠峰は、眼病といひて、授業をやめ、門人  
 をば、皆大湫につけ、美濃の笠松にいた



りて、これに居たり、さて大湫は、妻子を  
 のこして、江戸にゆき、一二年の内に、よ  
 びむかへんと、約束ヤクソクせしが、火災クワサイにかか  
 り、大に困窮コンキウして、よぶこと能はざるを、  
 冠峰、美濃ナシキにて之をきき、己の田宅テンタクをう  
 りて、金をとどのへ、數人をつけて、大湫  
 の妻子を、江戸へたくりつかはせり、  
 友ノ爲ニ勞スレバ、友ノ情ヲマス。



慈善

東京淺草の、ある老  
 人夫婦、ものまうで  
 ーけるに、堀の内ウチあ  
 たりにて、日々れ、道  
 にまよひるたるを、  
 下鷺宮村の大工、新  
 左衛門サエモンといふ者の

妻之を見て、あはれに思ひ、我が家につ  
 れゆきて、夫に其のよゝをかたり、けれ  
 は、新左衛門は、やみの夜をもいとはず、  
 一里餘イチナリアサリの道を案内し、ねんごろに行く  
 さきを教へければ、老人夫婦は、喜びて、  
 金そこはくを出して、謝シヤりければ、も、新  
 左衛門は、かたくいなみて、うけざりき、  
 人ヲメクニテハ、念フベカラズ。

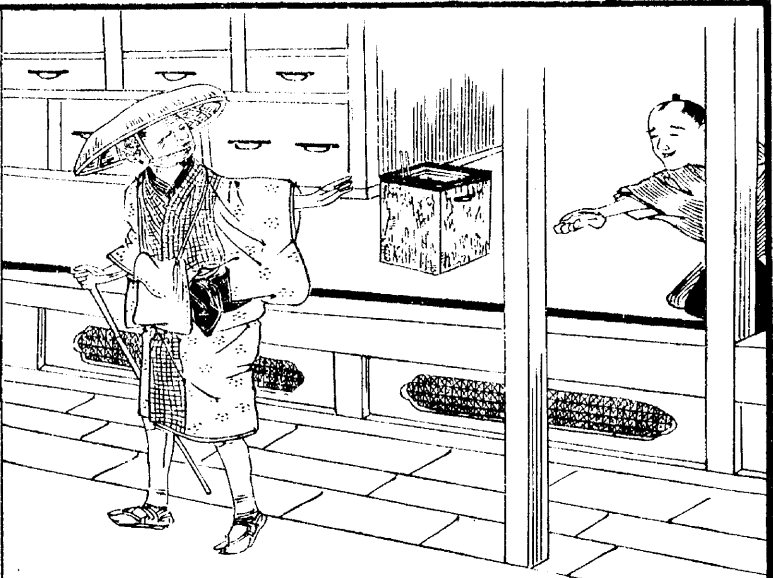


武勇

加藤カトウ清正キヨマサ、ぶゆうす  
 ぶれたる士を、めい  
 かかへんとして、さ  
 まぐそのにらびか  
 たを、かんがへけれ  
 ども、べつによきエ  
 夫も、おもひつかさ

りけり、ある時、人ともものがたりするに、  
 余は、とーごろ、ゆうーやを江らぶこと  
 に、心を用ひたれど、つまるところ、真マコトの  
 勇者ユウシャは、りちぎものにかぎるなり、とい  
 ひけるどぞ、りちぎとは、正直にして、義  
 理リにかたきをいふ、

正タカシキ道ニツクス勇氣ユウキハ勇氣ノ  
 モツトモ夕フトキモノナリ。

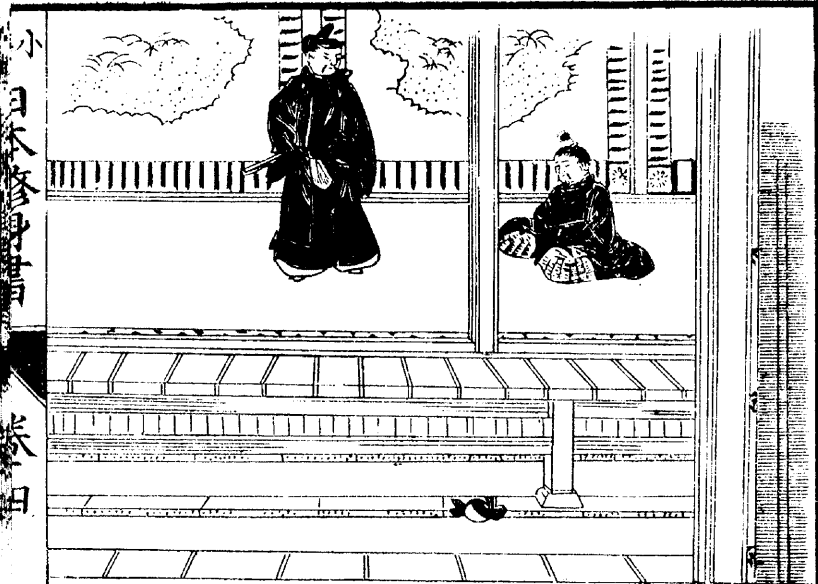


廉耻

京都に、龜婆カメバといふ  
 ものもらひあり、あ  
 る日まちなかにて、  
 金の多くいりたる  
 さいふを、ひろひけ  
 れば、其のかたはら  
 の家にもちゆきて、

ねどー一人はいかばかりうれふらん、  
 もしたづぬる人あらは、返ーあたへて  
 よとて、あづけおけり、日をへて、ねどー  
 ぬー来り、之を江て大に喜び、ひろひん  
 れー人に報いんとて、金一兩を、其の家  
 にねきーを、後龜婆にわたーけるに、龜  
 婆は、うけずしてたちさりけり、

財サイ二臨リン三テハ苟コウモウルコトナカレ。

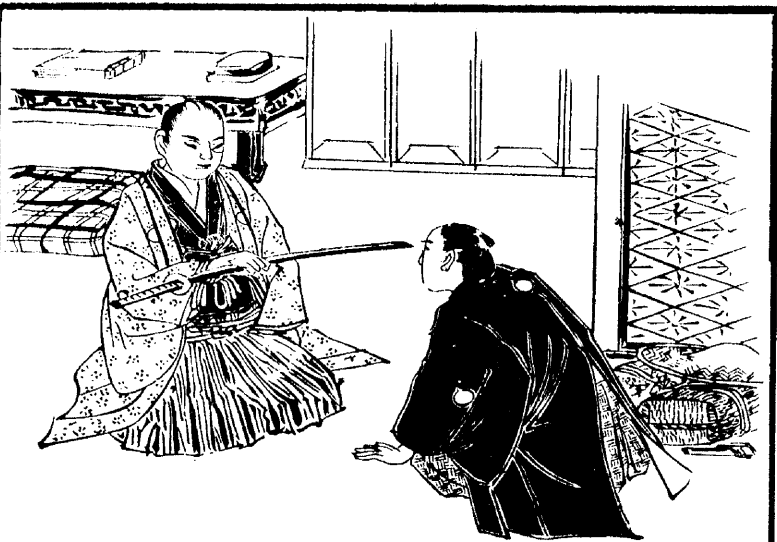


堪忍

行成カウ卿ゼイ殿上キヤウにて、實サチ  
 方カタ朝臣アツシとあひける  
 に、實方、何もしふこ  
 となく、しやくにて、  
 行成の冠カシムリをうちね  
 どして、小庭コニハになげ  
 たり、行成少しもさ

あがず、人して之をひろはせ、髪のみだ  
 れをつくろひ、ゐなほりて、一つかに其  
 の故を問ひければ、實方はちて、立ちさ  
 れり、主上シユシヤウ物かけより、之をござらんとて、  
 行成は、いうに、やさしき者なりとて、多  
 くの人をこ江て、藏人頭クラウドノカミといふ、ねもき  
 役にしたまひけり、

ナラ又堪忍カンニンスルガ堪忍。



寛大

尾張の人、細井甚三郎ホツ井 甚三郎といひ、性は寛大クワンダイにして、人の過アヤマをせめず、懇コソにさとて、其の非ヒを改め、一人なり、ある時、計算ケイサンに長トたる書シヨ

生に、家塾の會計をまかせしに、其の書  
 生、私に金を使ひ、歳末に至りて、之をつ  
 くのふ策に窮して、歸省をこひしに、甚  
 三郎、之をいれども、其の罪をとはず、却  
 て物を與へけり、數月の後、書生再来り、  
 大に前の非をくい、て、行を改め、是より  
 塾の益をなす事、少からざりき、

萬事寛三從へば、其ノ福自アツシ。



節制

花さき、鳥なき、そら  
 はかすみ、あたりて、  
 うららかなる三月  
 のころ、今年七歳な  
 る吾が兒をつれて、  
 畑道をあそびゆく  
 人あり、兒は、たもい

ろき、まきに、麥ムギのほをぬきて、笛をつくり、又、菜ナの花をつみどりなどせり、父之を見て、これはみな、農夫の苦クルシみつくりて、われらを養ふものなり、しかるを、いたづらに、取りすつるは、甚あしきことなり、と教へければ、兒は、さどりたりと見江て、すみやかに之をやめたり、  
 無益ノコトハ、スベカラズ。



勤儉

松マツ下シタノ禪ゼン尼ニ、其の子時トキ頼ヨリを、家にまねくとて、しやうどのやぶれたる所を、みづからつくろひ居たるに、尼の兄義景ヨシカミ来て、人にめいどて、みな

あたらしく、はりかへさせたまふみた、  
 よろしからんといふ、尼のいはく、吾も  
 そのことは知れども、思ふことあり、す  
 べて物は、少しそんどたる時時に、心を  
 つけて、つくろひたけは、たいはには、な  
 らぬものなり、今日は、時頼来るべけれ  
 ば、其のだうりをさとしさん爲なりと、  
 勤儉ハ家ヲサムル本ナリ。



儉素

時頼トキヨリある夜、其の  
 人せきなる、宣時ノゲトキを  
 よび、酒サケをすすめて  
 いひけるは、此の物  
 あれども、ひとり  
 てのむは、樂ラクしから  
 ず、故に君をむかへ



たり、<sup>サカナ</sup>しかれども有<sup>ナ</sup>なり、君<sup>ミコ</sup>なりやにゆ  
 きて、何<sup>ナニ</sup>にてても、求め<sup>モトメ</sup>こられよと、宣<sup>ノボ</sup>時<sup>トキ</sup>あ  
 かりを<sup>カ</sup>てらして、<sup>サ</sup>くりやにいたり、皿<sup>サラ</sup>に  
 少<sup>オチ</sup>しはかり、みそののこりたるを、とり  
 来て、これにて事<sup>コト</sup>たれりとして、二人<sup>ニヒト</sup>とも  
 に、よもすがら、たのしみ<sup>ノゾミ</sup>飲<sup>ノ</sup>みて、よろこ  
 びをつくせり、

ヨク家<sup>ケ</sup>ニ儉<sup>ケン</sup>ニス。



慈仁

仁<sup>ニ</sup>徳<sup>トク</sup>天皇<sup>テウ</sup>、ごそくゐ  
 の四年、高<sup>タカ</sup>きとところ  
 にのほりて、人家<sup>ジンカ</sup>を  
 のぞみ見たまふに、  
 煙<sup>ケムリ</sup>のたつこと少<sup>オチ</sup>き  
 を以<sup>もつ</sup>て、民<sup>タミ</sup>のこんき  
 うせるを<sup>を</sup>知りたま

ひ、ことごとくそせいをゆるしたまひ、  
 宮の垣くづるれどもをさめず、雨風も  
 れども、屋をふかせず、かくて三年のの  
 ち、又高きにのぼりて見たまふに、盛に  
 煙たちければ、民とめり、朕またうれふ  
 る所なしとのたまひ、後また三年をへ  
 て、はじめて、宮をつくらせたまへり、

用ヲ節シテ人ヲ愛ス。



藝能

小式部十四歳の時、  
 こいよにうたあは  
 せといふことあり  
 一に、其の歌よみの  
 中にくははれり、人  
 みな、小式部の歌は、  
 丹後にをるその母

の、和泉式部シキブがつくれるならんと思へり、定頼卿サカヨリキヤウといふ人、小式部のつぼねの前にて、丹後につかはされし御使ツカヒは、かへりたりやといはれしに、小式部、定頼卿の袖ソデをひかへて、歌をよみかけければ、定頼卿おどろきて、へんかもせず、袖をひきはなちて、にけられけり、

幼ニシテ之ヲマナブ。



勉強

攝政道長公セツシマウミチナガ途ミチにて、十二三歳なる童子ドウジの、馬をひきなながら、かた手に、書物シヨモツをもちて、よみつつゆくを見て、見どころある童子なりとて、家

につれかへりて、大江<sup>オホエ</sup>匡衡<sup>マサヒラ</sup>といふ、かく  
 しゃにしゃがはせて、學問<sup>ガクモン</sup>させられけ  
 るに、その童子は、はたしてかゝこく  
 て、しだいにしゃうたつて、はくがく  
 のきこは高く、後朝廷につかへて、博士<sup>ハカセ</sup>  
 となれり、大江時棟<sup>トキムネ</sup>ときこは、此の  
 童子なり、

身ヲタツルハ學<sup>マナブ</sup>ヲサキトス。

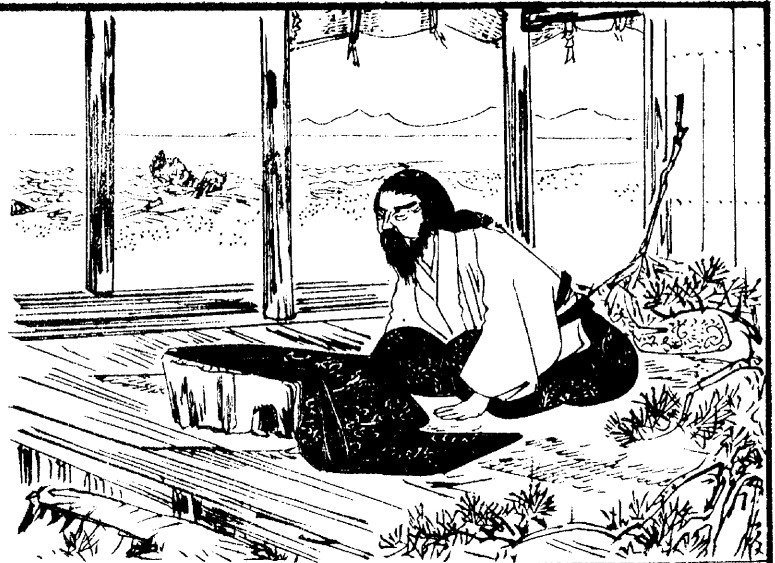


公益

周防國<sup>スヘノクニ</sup>熊毛郡<sup>クマモリ</sup>室積<sup>ムロツミ</sup>  
 にて、小學校をたて  
 んどて、守田英淳<sup>モリタヒサツ</sup>と  
 いふ者の家に、人人  
 あつまりて、さうだ  
 んすれども、金を出  
 して、之をたすくる

者なきに、苦みけるに、英淳の家の下婢、  
 藤といふ者、常にたいせつにする、銀の  
 釵を出して、いきんのいくぶんに加へ  
 られたりと、いひければ、人人その志に  
 かんじ、これより、金圓物品など、きふす  
 る者多くいでて、たやすく學校をたつ  
 ることいできけるとぞ、

人ノ害ヲ除キ、人ノ利ヲオコスベシ。



忠貞

醍醐天皇の御世に、  
 菅原道真公、右大臣  
 となりて、天朝をほ  
 さいたてまつり、さ  
 いけつ流るるが如  
 くにて、勢やうやく  
 盛なりければ、左大

臣時平公之をぬたみ、さんけんをかまへて、公を筑前にながせり、然れども、公、少しも朝廷を、うらみたてまつらず、かつてたまひし所の、御衣を出して、毎日拜して、したはれけり、かくて配所にて、ゴウ薨せられけるが、後つみななき事、明になりて、クニキ位をわくり、カミ神にまつられたり、  
臣トシテハ、忠ニトドマル。

### 愛國

むかし大伴古磨といふ人、唐朝に使せし時、彼の朝廷にて、諸外國の使人を、會元殿にめりて、ガ賀正の禮を受けられけり、此の時、我が國の坐位を、西方の第二位として、吐蕃の下に定め、新羅を以て東方の第一位として、大食國の上に定められければ、古磨大に憤り、顔色を正

しく、ことばを嚴にして、新羅は、古よ  
 り我が日本に朝貢せる國なり、然るに  
テウコウ  
ミツギ  
 今あへつて、大日本國の上にねおるる  
 は、甚道理に背けりといたく論トけれ  
 ば、つひに新羅を西方の第二吐蕃の下  
 とし、我が國を、東方第一に改められき、  
 國ノ爲ニツクスハ、父母ノ爲ニツク  
 スガ如クナルベシ。

小  
 學  
 日本修身書卷四 終

明治二十五年五月一日印刷  
 明治二十五年五月五日出版

定價金六錢五厘

版 權 所 有  
 著 者 稲垣 千穎  
東京市千谷區仲枝町三丁目廿番地  
 發 行 兼 三 浦 源 助  
岐阜市米屋町廿二番戶  
 發 賣 所 成美堂支店  
東京市日本橋區本町壹丁目  
 發 賣 所 石井 鈎三郎  
大坂市東區備後町四丁目

